Vo.20

和而不同

慌ただしかった衣替え。服装や寝具の選択は、「変化」に対して実に素直だ。まさに〝肌で感じ取った〟通りに自身の行動が反映されるひとつの例であろう▼この秋、《甲子園の大スター》二人が偶然か必然か相次いで引退を迎えた。〝平成の怪物〟こと松坂大輔投手、そして〝ハンカチ王子〟こと斎藤佑樹投手。恐らく誰もが一度は聞いたであろうビッグネーム。プロでの実績こそ違えど、紛れもなく野球界の一時代を圧巻した二人だ▼今から二十二年前、155キロで鮮烈なデビューを飾った松坂投手。引退の日に投じた最後の一球は、116キロの直球であった。栄誉ある絶頂期を経たからこそ、現在の姿とのギャップがもたらす苦悩は計り知れないものがあったはずだ。そんな〝特別な世界〟に住む人は、引退に際してその「変化」をどう眺め、咀嚼（そしゃく）していったのだろうか▼衣替えにも例外はある。小学生の頃、冬が近づくと友達数人で〝いつまで半袖で過ごせるか〟を競う遊びをしていた。特別な理由はない。ただ単に流れに身を任せないことへの意地比べみたいなものだ▼本来「変化」は簡単には受け入れられない。その対象が自分自身であればなおさらだ。身体や心、ひいては いのちについてまで。いざ思い通りにならない場面に出くわしたとき、その状況をどう受け取っていくか。いつかは今かもしれない。その心支度は柔軟にしたい〔徳〕